

# 誰が W. G. なる者に英国悲劇『ゴーボダック』 ボダイ の本体を渡したのか？

—— 1570年のデイ版におけるルクレティア譚の  
 レトリックとレイプ表象にまつわる政治性について ——

大 和 高 行

はじめに

Harbage (1964) その他に拠れば、『ゴーボダック』(*Gorboduc*) は、トマス・ノートン (Thomas Norton, 1532-84) とトマス・サックヴィル (Thomas Sackville, 1536-1608) の共作により、1561年のクリスマスに法学院インナー・テンプルで初演されたと推定される劇である。無韻詩 (blank verse) で書かれた、現存する最古の英国悲劇であり、最古の英国歴史劇でもあり、あるいは最古の英国復讐悲劇としても分類出来る多重的な性質を持つこのテキストが書かれたその前年には、トマス・プレストン (Thomas Preston, 1537?-98) の『ペルシャの王キャンバイシーズ』(*Cambises; King of Persia*) が上演されている。こうした演劇史の動向に注意を向けると、当時、短期間ではあるが、国王を主人公とする悲劇が連続して作られたという一種の流行の存在に気づく。中でも取り分け、この時期に、古代ブリトンを舞台として、古の王ゴーボダックの物語が書かれ、上演された点は注目すべきである。<sup>(1)</sup> イングランド教会の支配体制に反発する国内外のカトリック教徒たちの抵抗勢力の不穏な動きやエリザベスの結婚問題が政治的な行く先に対する不安を生んでいた当時のコンテキストで、英文学史上極めて「特異な」<sup>ユニーク</sup>位置を占める『ゴーボダック』が書かれたことの意味について、その政治的機能の解明を目指して生産される近年の論文の多さは、君主論・国体論・統治論としての本戯曲ボダイの本体に関心が集まっていることの証左で

もある。<sup>(2)</sup> これらの議論に耳を傾けていると『ゴードック』は、確かに、教訓を示す政治的テキストとして、また、正史に代わる代<sup>オールタナティブ</sup>用物として、機能し得たように見える。

他方、文学的見地から『ゴードック』というテキストを見てみると、もう一つの見逃すべからざる特質があることに気づく。即ち、無韻詩で書かれた最初の劇詩である『ゴードック』は、5幕構成というセネカ的要素を持っていて、シドニーが『詩の弁護』で言うように、<sup>(3)</sup> 文体の崇高さと立派な道義に満ち、教訓悲劇として機能するのに相応しいテキストである。このことは、1561年に法学院インナー・テンプル (Inner Temple) でクリスマス祝典の余興として初演され、翌1561 [1562] 年1月18日にはホワイトホール王宮 (Court of Whitehall) にてエリザベス女王の御前で上演されたらしいこととも密接なつながりを持つ。大衆演劇としてではなく、あくまでも観客層は知的エリートあるいは高位の為政者に限られていた。また、本戯曲の書き手であるトマス・ノートンとトマス・サックヴィルの兩人とも法学院に集う若き秀才であり、かつ、下院議員を務めた議会政治家として、現実の政治と深い関係を持つ若者であった。このような点を踏まえれば、格調高い文体を採用することによって、知的エリートサークルという限定された観客を対象とし、享受された『ゴードック』の著<sup>オーサーシップ</sup>作と権<sup>オーソリテイ</sup>威についても、政治的な注意を払わねばならない。

『ゴードック』というテキストにまつわる政治性を問題にするのは、こうした上記の複数の理由による。ジャンルの問題、創作時期と切り放すことの出来ぬ時事的な問題、ブリトン建国史の劇化とテューダー朝絶対王制確立に向けた動きとの関係の問題、法学院と宮廷と議会との関係の問題などについての議論が可能のように、『ゴードック』はそれ自体極めて高い政治性を帯びたテキストである。ただし、一口に政治性と言っても、扱う範囲が様々なので、本テキストが読み物として世に出て以来、身体表象を通して喚起されるイデオロギー性が、どのような装置を通じ、どのような機能を果たしてきたかを解明することに小論の主たる目的を定めたい。中でも、今回は1570年のデイ版に掲載された「刊行者緒言」に主たる議論を絞り、『ゴードック』というテキスト

の本体がどのような経験を経て、市場経済の中に流通していったのか、その様子をレイプという行為に付随する政治性の問題と絡めて論じることにする。

## テキストに見られる女性表象と政治性

### —フェミニズム批評と身体論、英国史学の連係による新たな読みの成果と課題—

小論末尾の書誌を見れば分かるように、テキストの女性性あるいは男性性に着目する最近のフェミニズムの読みは、『ゴーボダック』というテキストが持つ政治的要素に焦点を当てながら、いわゆる、伝統的で一枚岩的な男性的解釈を突き崩してきた。Vanhoutte (2000) が優れた論を展開しているように、劇作家ノートンとサックヴィルの作家主体と女性君主エリザベス一世との関係やブリテンが「母なる土地」として表象されることの意味が考察され、死すべき運命にあり、また時として政治的判断を誤ってしまう可能性がある君主に忠誠を尽くして従うよりは、その主君も含め、「イングランド人」全員が、全ての者にとっての母である「イングランド」という共同体に忠誠を尽くすべきであることを説いた劇であるとする、新手のイデオロギー解釈が提示された。そこでは、エリザベス女王は『ゴーボダック』というテキストから政治を学び、独身を貫き、生物学上のセックスは「女性」だが、ジェンダー上は「男性」に位置づけられる、強い主体を確立することが出来たという仮説が立てられる。女王はイングランドの全ての民にとっての「母」となることで、自らの政治基盤を揺るぎないものにし得たというのである。Vanhoutte に代表されるそれらフェミニズムの読みの特徴は、James and Walker (1995) などの近年の歴史学の成果と手を結んで、説得力を生む基盤を着実に固めている点にあると言える。

ところが、ヴィデナ (Videna) やマーセラ (Marcella) の女性登場人物や“motherland”として表象される「イングランド」という共同体についての議論はよくなされるのに比して、「刊行者緒言」に見られる女性表象について、その政治的な機能を絡めて論じたものは少ないように思われる。<sup>(4)</sup> 1570年に出版

業者ジョン・デイ (John Day or Daye, 1522-84) によって印刷された刊本に付された「刊行者緒言」には、レイプの比喩が使われ、ルクレティア・モチーフが下敷きになっていることは明かであるというのに、これでは片手落ちである。そこで、小論では、近年のフェミニズム批評さえもが見落としてきた、「刊行者緒言」に見られる女性表象の意味について考えることにする。

### 「刊行者緒言」に見られる女性表象とデイの「語り」の戦略

「刊行者緒言」には、以下のような描写がある。

...yet one W.G., getting a copy thereof at some young man's hand that lacked a little money and much discretion, in the last great plague, an[no]. 1565, about five years past...and neither of them both made privy, put it forth exceedingly corrupted: even as if by means of a broker for hire, *he should have enticed into his house a fair maid and done her villainy, and after all to-bescratched her face, torn her apparel, betrayed and disfigured her, and then thrust her out of doors dishonested.* In such plight after long wandering she came at length home to the sight of her friends, who scant knew her but by a few tokens and marks remaining.

(‘The P[rinter] to the Reader’, イタリックは筆者)<sup>(5)</sup>

[前略] ところが、W. G. なる者が、わずかな金に困った無思慮な青年某の手から脚本の写しを入手し、今から5年ほど前、紀元1565年に疫病が流行した時のこと、[中略] お二人に無断で間違いだらけの刊本を出版したのです。まるで金で雇われた女衞ぜげんのごとく、この男は美しい乙女を売春宿に誘い込んで辱め、花の顔かんばせを惨くも掻き傷だらけにした後、着物を引き裂き、見違えるほど彼女を醜く汚して、恥ずかしい姿のまま外に放り出しました。このような苦しみに遭った乙女は、長い放浪の末に、変わり果てた姿で、身内の方々の許に舞い戻りました。身内のお二人でさえ、わずかな

しるしと面影から、辛くも乙女であることを知り得たほどです。<sup>(6)</sup>

男性の暴力性を女性身体との関係において表現する、この独特の修辞法を特徴とするルクレティア譚は、ローマ古伝説に起源を発する。イングランドにおける戯曲出版の歴史の中で、たとえばシェイクスピアの第1・二つ折本に見られるように、「まえがき」において不具な身体の比喩が用いられることはままある。だが、男性性、女性性として表象される身体には、ある種の政治性がつきまとう。この点を忘れてはならない。それが他者を辱める言説を作り出す装置となっている時は尚更のことである。女性身体のレイプといった暴力的イメージを用いるルクレティア・モチーフにおいて、ルクレティアの陵辱された身体は、その所有権争いを通じ、政治的優位を確立しようとする家父長を代表者とする一族の復讐の正当性を支持する根拠となり、政治的機能を帯びる。それが王制復古期の異なる体制支持派の間で盛んに利用された、権力闘争の一手段であったことを暴いた吉原ゆかり氏の論考<sup>(7)</sup>のおかげで、このモチーフの機能は今日ではよく知られることになったが、ここでもし一般的解釈に従って、W. G.なる者が、1565年9月22日にこの戯曲の「海賊版」を出した出版業者ウィリアム・グリフィス (William Griffith)<sup>(8)</sup>のことを指すとすれば、本戯曲の初演の地インナー・テンプルから程遠くない St. Dunstan's in the West<sup>(9)</sup>の境内に店を構えていたグリフィスと、Aldersgate を本拠地として商業活動に勤しんでいたジョン・デイ<sup>(10)</sup>との出版業界内での関係にも意識を向けねばなるまい。

ところで、「刊行者緒言」には共著者ノートンとサックヴィルの名前についての言及はあるが、『ゴーボダック』の著<sup>オーサーシップ</sup>作と権<sup>オーソリティ</sup>威に関する極めて重要な情報の基盤が、実に曖昧な表現になっている。そもそも、W. G.なる人物に英国悲劇『ゴーボダック』の本体を渡したとされる「青年某」(“some young man”)が誰なのかが分からない。テキスト内にある、過去形で書かれた黙劇を根拠として、おそらく、インナー・テンプルでの上演に関わった者の誰かだろうと仮定する説<sup>(11)</sup>は存在するが、誰が『ゴーボダック』の本体を身売りさせた<sup>ボデイ</sup>「女衒」(“a broker”)なのかが依然として不明である。「青年某」のお陰で、『ゴー

ボダック』の「脚本の写し」(“a copy”)が出版業界に渡り、読み物としてのテキストが市場に流通することになった。今日の私たち読者が『ゴーボダック』の本体を手にとって鑑賞することができるのは、「わずかな金に困った」(“that lacked a little money”)「青年某」の身銭欲しさからの行為の恩恵に与るところが大なのに、その功績に対し、一方的に「無思慮な」(“much discretion”)という形容を通じて不当な評価を下されるのは理不尽な気さえする。「女術」と辱められる「青年某」は誰なのか。「刊行者緒言」においてはルクレティア・モチーフが重要な修辞法となっているために、『ゴーボダック』の本体を W. G. なる者に「売った」とされる「青年某」の主<sup>エージェンシー</sup>体がどうしても気になる。

我々読者は、「刊行者緒言」の「語り」を根拠に、一般に流通している「通説」を信じてしまいがちである。しかしながら、「青年某」のアイデンティティがはっきりしないので、「語り」の信憑性に対して疑いが湧く。この文章は、「刊行者緒言」(“The P to the Reader”)という表記から、おそらくはディ単独の手によるものである。ノートンとサックヴィルの戯曲『ゴーボダック』の正しき姿を世に送り出す使命を担っての出版だと主張する「語り」に見られるその自負心には、家父長的自意識が読み取れはしないか。あるいは、ジャスパー・ヘイウッド (Jasper Heywood, 1535–98) が1560年に出したセネカ悲劇の翻訳の一編『サイエスティーズ』(*Thyestes*)<sup>(12)</sup>の序詞(“The Preface”)において法学院に集う8人の「ミネルヴァの下僕たち」(“Minerba’s men”)として名前を挙げられているノートンとサックヴィルの若き知的エリート——前者は熱狂的カルヴァン主義のピューリタンとして知られ、法律家としてカトリックに対し厳しい審問を行ない、カトリックを弾圧したことで知られた下院議員、後者<sup>(13)</sup>はエリザベス1世と親戚関係を持ち、1557年に下院入りし、女王の寵を得て、たびたび大陸へ外交使節として派遣され、法律家としてスコットランド女王メアリ (Mary Stuart, 1542–87) に死刑判決を宣告し、エセックス伯 (Robert Devereux, Earl of Essex, 1566–1601) の裁判にも関与し、1563年版の『為政者の鏡』(*A Mirror for Magistrates*, 1559–1609)に「序章」(“The Introduction”)ならびに「バッキンガム公の嘆き」(“The Complaint of Henry Duke of Buckingham”)

を寄せた王党派の貴族——という実力者の「正しきテキスト」の出版を助けるといった大義の裏には、「刊行者緒言」を締め括る「語り」、即ち、「と申しますのも、乙女のために私が支払ってやったのは、皆様にお目見えするために着せた、裏地が白の<sup>(14)</sup>この質素な黒い衣の出費だけなのですから。」（“for she did never put me to more charge, but this one poor black gown lined with white that I have now given her to go abroad among you withal.”）という然り気ない言い回しに反して、出版と見返りに得られる「何か」が見え隠れするような気はしないか。このことについては、1565年刊行の『ゴーボダック』の題名を『ポレックスとフェレックス』（*Porrex and Ferrex*）に変更して出版されたディ版の売り込み戦略と併せて考える必要があるだろう。

上で引用したディの「語り」のレトリックに着目した時、1565年のいわゆる「海賊版」が「辱められた娘の身体」のメタファーを用いて表現され、一方、1570年の「ディ版」は、その「搔き傷だらけの顔のまま、引き裂かれた着物を着た辱められた裸体」に新たにきちんとした服を着せるといったイメージを用いて表現されている点に気付く。新版の著作権上の正当性とテキストとしての優位性を説明するために、続けてディは、「せめて人並みには清く淑やかなる体裁を整えるべく、乙女に新たに衣装を着せ、かつての身なりに戻して」（“for common honesty and shamefastness new apparelled, trimmed, and attired her in such form as she was before”）という風にたたみかけるように、同種のメタファーの使用を繰り返す。だが、これこそ新版『ゴーボダック』の本体<sup>ボ デイ</sup>を売り込む宣伝的な「語り」のレトリックがもたらす魔法の呪文なのである。即ち、新版の刊行以来、「グリフィス版」の本体<sup>ボ デイ</sup>と、傷を癒された女性身体として表象される「ディ版」の本体<sup>ボ デイ</sup>という二つの身体、そして、身体の上から纏う衣服のメタファーを用いたレトリックによって新たな織物<sup>テクスチャー</sup>が生み出された。この修辞戦略はこれまでのところ、読者をディの術中に嵌めるという点において成功してきた。つまり、「犯された処女テキスト」であるグリフィスの「海賊版」に基づいて、「身なりを整えられた女性テキスト」である「ディ版」が用意されたという事実を読者の意識から巧みに消すという点において。

そもそも、二つの版にはどのような違いが存在するのか。結果から言うと、Greg (1939:115) が指摘するように、デイのレトリックによって著しく粗悪な刊本と印象づけられた「グリフィス版」と「デイ版」との間には、デイがここで殊更大袈裟に騒ぎ立てているほどの違いは見られない。確かに、「グリフィス版」には誤植が散見される。だが、これのみを以て「グリフィス版」を「粗悪本」だとして評価を下すことは早計であろう。ただし、ユービュラス (Eubulus) の台詞の一部に「グリフィス版」には存在するが、「デイ版」では大幅に欠落している箇所 (1389-96行) があり、これについては詳しい分析が必要とされるであろう。これら以外の違いと言えば、上の引用で「皆様にお目見えするために着せた、裏地が白のこの質素な黒い衣」と表現された装丁<sup>(15)</sup>ぐらいで、これから見てゆく欠落部分に大きな問題がなければ、デイはまさに新たな「衣」を着せただけで『ゴーボダック』というテキストを売りに出し、「グリフィス版」に続けとばかり、二匹目の泥鰌を狙ったことになる。さて、真相はどうか。

問題の欠落箇所 (1389-96行) は以下の通りである。

That no cause serves, whereby the subject may  
 Call to account the doings of his prince;  
 Much less in blood by sword to work revenge  
 No more than may the hand cut off the head:  
 In act nor speech, no, not in secret thought  
 The subject may rebel against his lord,  
 Or judge of him that sits in Caesar's seat,  
 With grudging mind to damn those he mislikes.

いかなる理由があるにせよ、臣民が君主の行ないについて責任を追及するなどもっての外。  
 ましてや剣をとって流血の復讐を企てるなど



手が頭を切り落とすようなもの。

行動においても発言においても、いや、たとえ心密かな思いにおいてすら、  
臣下が君主に叛くことがあってはなりません。

また、反りが合わぬ人を呪う妬み心で  
帝王の座に在す御方を咎めてはなりません。

何故この箇所が8行もの大部に亙って欠落しているかについては、(1)1368-73行の情動的な台詞を単に強めただけに過ぎないから、(2)偶然の欠落による、(3)サックヴィルが執筆したとされる、世俗の権力への無条件な従順を説くこの台詞を、熱烈なカルヴァン主義者だった共著者ノートンが問題視し、意図的に削除した<sup>(16)</sup> など様々な理由づけがなされている。だが、真実は明らかではない。<sup>(17)</sup> 然るに、この8行が後の1590年版には含まれているという事実を考慮に入れつつ諸説の再検討を図ることは、我々の関心事を謎解く有効な手段となるろう。

まず、第一の説について検討を試みる。便宜上、1365-73行のグエナード (Gwenard) の台詞全体を引用する。

**GWENARD:** Shall subjects dare with force  
To work revenge upon their prince's fact?  
Admit the worst that may — as sure in this  
The deed was foul, the Queen to slay her son —  
Shall yet the subject seek to take the sword,  
Arise against his lord, and slay his King?  
O wretched state, where those rebellious hearts  
Are not rent out even from their living breasts,  
And with the body thrown unto the fowls  
As carrion food, for terror of the rest!

グエナード 臣民の分際で、あえて暴力に訴えて、  
 君主の罪に報復してもよいものか。  
 その罪が極悪のものであったとしても——確かに  
 邪悪な犯罪だった。妃はわが子を手に掛けたのだから——  
 臣民が剣をとって、  
 主君に叛いて、殺してもよいものか。  
 ああ、惨めな国よ、ここでは反逆者の心臓が  
 生きながらその胸から抉り出され、  
 亡骸が鳥どもに投げ与えられ、  
 腐肉をついばまれ、恐ろしい見せしめになることもないのだ。

上で別々に引用したこれらの台詞を語る二人の登場人物——ギリシャ語で「慎重居士」を意味する名前を持つ顧問官ユービュラスとカンバーランド公グエナード——はそれぞれが異なるキャラクターであり、持論を主張する際、同じような内容のことを言ったり、似た比喩を用いたりするのは、自然なことのようと思われる。そもそも『ゴードック』では、両派に分かれて喧喧愕愕の議論が展開され、欠落した8行以上にくどい繰り返しや比喩の言い換えが散見される。表現のまずさが欠落の原因だとすれば、その表現が政治的な揶揄として機能するとか、何かもっと強力な証拠を提示しなければ到底呑めない。<sup>(18)</sup>

次に、第二の説についての検討に移る。これまでの議論から得られた状況証拠から、「デイ版」が「グリフィス版」を下敷きにして組まれたテキストであることは先ず間違いないだろう。だとすれば、「グリフィス版」をコピーする際に当該8行の箇所がうっかり見落とされたという可能性は高くなる。何しろ、ユービュラスの台詞は103行にも互る。実際、1590年版<sup>(19)</sup>では欠落8行がユービュラスの長台詞の元の位置に戻っている。ゆえに、この説は最も説得力のあるものとして傾聴に値するだろう。

ただ、ここで見逃してはならないのは、「刊行者緒言」においてW. G.なる者を強姦者<sup>レイピスト</sup>として非難したデイこそ、実は、「グリフィス版」処女テキストを

辱めた強姦者だ、という事実が浮かび上がってくる点である。当該8行箇所の見落とし説が正しいとなると、デイは「グリフィス版」の本体の一部を不当にも切り落としたということになる。その暴力性は、陵辱されたルクレティアの惨めな身体との連想を掻き立てるし、強姦され、手首を切られ、舌を切り落とされたフィロメラの女性身体との連想をも誘発させる。しかも、たちが悪いのは、「グリフィス版」と「デイ版」を突き合わせ、逐一比べながら読まないとおそらく読者は欠落8行には気づかないという点である。いや、更に正確に言えば、グリフィスを強姦者に仕立て上げる巧みな修辞と相まって、その先制攻撃が故に、デイは自らの主張に信憑性を与え、勝利を収めているのである。印刷業者デイは、ノートンとサックヴィルのサインが紙上から消えたデイ版で、外ならぬデイ自身の「語り」の中で、原作者の意向というお墨付きを味方につけ、著作に関する権威を手にした訳である。(そして、おそらく、反論の機会を持たないグリフィスには有無を言わせなかった訳である。)この推測が正しければ、『ゴボダック』というテキストは、出版業者間の指導権争いに利用された可能性がある。

最後に、ノートン介入説という第三の説について検討を試みる。DNBに拠れば、1567年から1570年にかけてのノートンは、カルヴァニズムに根ざす宗教的道義心を高めている頃合いであり、1570年当時にはアレクサンダー・ノウエル (Alexander Nowell) の翻訳 'Catechism' を出版している。そのノートンは、Craik (1958) が指摘するように、「デイ版」にはない8行を意図的に削除しなければならないような必要に駆られていたのか。残念ながら、この説を裏づける十分な証拠がない。介入説が正しいとしても、そもそも当該の8行に異議を申し立てて削除するよう指示したのがノートンなのかさえも分からない。実のところ、Craik が提示する状況証拠さえ眉唾物である。

### グリフィスの追放

1570年代のデイは、ロンドン司教やカンタベリーの大司教の後ろ盾を得て活

発な商業活動を行っていた。自身が刊行に携わる新刊書に10年間の専売特許を自動的に与えられるなど、数々の有利な勅許をデイが欲しいままにしていたと、Blayney (2000:338) は指摘する。だとすれば、『ゴードック』の題名が『ポレックスとフェレックス』に改められて新刊書となり、商品として売られる中で、デイは一財産を築いたかもしれない。<sup>(20)</sup> この活動を支援したのが、政治的な力を持つ有力者であることは否定出来ない。何しろ、デイのために、カンタベリーの大司教がエリザベス一世の宰相 Lord Burghley こと William Cecil に嘆願書を書いたという事実が存在するのである。

1570年版のタイトルページでノートンとサックヴィルの名を消したデイは、同一紙面において同時に、グリフィスの完全追放をも果たしている。このことは、小論末に載せた、「グリフィス版」と「デイ版」のタイトルページをそれぞれ見れば一目瞭然である。「グリフィン」、「グリユプス」、「グリフォン」と様々な名前と呼ばれる Apollo の聖獣、鷲の頭と翼、ライオンの胴体を持つとされる伝説上の怪獣をあしらったグリフィスの刻印を、デイはもの見事に消し去っている。ギリシャ神話に起源を持つ Apollo の聖獣グリフィンの身体は抹消され、代わりに、ローマン体と呼ばれる新しい活字を取り入れたデイの印刷所の文字が居座っている。

このいわばローマによる占領は——タイトルページにおいてのみ特に顕著な現象であるけれども——ブリテン建国史の起源をローマに求めようとするテューダー朝の動きと偶然ながら重なり合う。他方、(グリフィス版に印刷された刻印のジェンダーをどのように扱うかという問題もあるが、) 炎のようなものを口から吐き、あるいは花か何かを口にくわえて、力と広い知識を示しつつ、悠然と横向きに座っているグリフィン (griffin sejant) は、果たして、イングランドの王家の紋章とどのくらい重なり合って受け止められたのだろうか。もし仮に、かなりの程度で類似的な連想が働いたとすれば、我々が予想する以上に、グリフィスの刻印はデイにとって目障りな代物であったに違いない。

## 結論

これまで述べてきたことから、以下のように結論づけられる。

第一に、『ゴーボダック』のテキストは、1570年のデイ版の「刊行者緒言」にある表記において、1565年にウィリアム・グリフィスによって刊行されたテキストを「粗悪版」として一方的に位置づけることにより、著作権上の正当性とテキストとしての優位性を声高に謳い上げ、新版『ポレックスとフェレックス』の商品としての価値を高める戦略が採られている。

第二に、その際、「刊行者緒言」においてはルクレティア・モチーフが用いられ、『ゴーボダック』の本体をW. G.なる者（おそらくは、デイにとっての同業者ウィリアム・グリフィスを指す）に「売った」とされる「女衞」の「青年某」と、金を払って売春宿で『ゴーボダック』の本体をレイプした1565年版の刊行者グリフィスを悪人に仕立て上げるレトリックが効果的に機能する。このレトリックは、デイ版を正しきテキストとして市場に流通させるという個人的目的を帯びていて、作品の売り文句として強力な販売力を生み出したと推察される。事実、現代の読者も1565年に出されたグリフィス版を「海賊版」と位置づける「通説」を信じて疑わず、『ゴーボダック』の処女版としてのグリフィス版のテキスト性について正面から論じられることは少なかった。

第三に、デイ版の「刊行者緒言」において用いられているレトリックの技の力で、グリフィス版を下敷きに『ゴーボダック』の処女本体を「盗用」したデイ版の乗っ取り行為そのものの可能性が完全に消されることになる。レイプの比喩は、強姦者として名指しされた「W. G.なる者」、即ち、ウィリアム・グリフィスに一方的敗北を余儀なくさせるほど、強力なレトリックとして働いた。

第四に、これらを裏づける証拠として、グリフィス版の第5幕第1場にある103行にも互るユーピュラスの長台詞のうち、1570年のデイ版では欠落している8行についての詳細な検討を行なった。当該箇所が大部に欠落した理由として考えられる可能性のうち——自己検閲という可能性も含め——出版業者デイのエージェントとしての権限を全く無視して立つ仮説は存在しなかった。

(そして、この言わば、欠落8行という「黙して語らぬテキストの一片」が、結果的に、皮肉にも、デイの「語り」のレトリックに挑む根拠を提示し、新たな政治的な「読み」に力を与える材料となった。)

第五に、レイプの比喩との絡みにおいて、グリフィス版のタイトルページに見られる身体に加えられた暴力を受容上の変化に注目しながら考察した。デイ版では「グリフィン」の身体と原作者ノートンとサックヴィルの名前が削られ、デイの印刷所に新しく導入されたローマン体の活字で刻印された新たな題名とデイ自身の名前がそれにとって代わったことが分かった。

これら全てのことから、読み物としてのグリフィス版『ゴードック』のテキスト<sup>ボディ</sup>本体は、デイの象徴的強姦<sup>レイプ</sup>を経て、市場経済の中に再び送り出され、『ポレックスとフェレックス』という名で流通していったという仮説が立つ。既に確認したように、テキスト内に男性性、女性性として表象されるものがある時、あるいは、レイプという行為が文学の中で描かれる時には優劣関係が生じ、そのような言説には常に政治性が備わる。やり手の出版業者デイは、ルクレティア譚のレトリックとレイプ表象<sup>ライヴァル</sup>が好敵手を打ちのめすのに絶好の手段だと十分に弁えて大いに利用し、一見、国家レベルの問題を論じたテキストと見える『ゴードック』を私的に占<sup>アプロプリエイト</sup>有するために、「刊行者緒言」という宣伝文句を書いた。と同時に、グリフィス版の象徴ともいえるべき、木版によって刻印された「グリフィン」の目障りな身体を「タイトルページ」から一掃してしまったのである。

## 註

(1) ブリテン建国史の伝説とシェイクスピアの『シンベリン』との関係については、真部(1999)、高森(2000)を参照されたい。この問題は英国歴史劇というジャンルに関わる点では重要ではあるが、本議論においてはその関係を示す必然性が薄いので、敢えて取り上げない。ここでは、『ゴードック』や『シンベリン』以外の戯曲を社会構造の変化も含めた歴史枠において、Berg(2000)、Dust and Wolf(1978)、Hergerson(1992)、James(1997)、Ribner(1957)らが議論している内容に譲る。

(2) Axton(1977)、Bevington(1968)、Breitenberg(1988)、Coch(1996)、Hartley(1981)、James and Walker(1995)、Jones and White(1996)、King(1990)、Levin(1994)、Moretti(1982)、

Neale (1958), Vanhoutte (1996), Vanhoutte (2000) を参照されたい。

(3) Feuikkerat, ed. (1968), p.38.: “Our Tragidies and Commedies, not without cause cryed out against, observing rules neither of honest civilitie, nor skilfull *Poetrie*. Excepting *Gorboducke*, (again I say of those that I have seen) which notwithstanding as it is full of stately speeches, and wel sounding phrases, clyming to the height of *Seneca* his style, and as full of notable morallitie, which it dooth most delightfully teach, and so obtaine the very ende of *Poesie*.”

(4) Breitenberg (1988) は聖書翻訳との関連性を示唆しながら、ルクレティア表象を用いたデイのレトリックの特質について論じている。

(5) 小論において底本としたのは、William Tydeman (ed.), *Two Tudor Tragedies* <Penguin Classics> (Harmondsworth: Penguin, 1992) である。以下、『ゴーボダック』からの引用は全てこの版に拠る。しかしながら、「グリフィス版」(STC 18684), Cauthen 版 (1970) 及び Scholar Press Facsimile 版 (1968) も、「グリフィス版」と「デイ版」の違いを比較する際に随時参照した。

(6) わが国において、『ゴーボダック』の訳は、斎藤國治 (1981) と小林潤司・丹羽佐紀・山下孝子・大和高行 (共訳, 2001) の二種類が存在する。小論では後者の翻訳を、字句を変えずにそのまま用いた。尚、小林潤司・ほか (共訳) の解説と訳註の表記と類似する用語や表現が、小論中、議論の展開において見られる箇所があるが、これらの用語や表現をそのまま使うことに関して小林氏の了解を得ている。小林氏には記して謝意を表す。

(7) 吉原 (2001) を参照されたい。

(8) 残念なことに、グリフィスに関する伝記的な情報は少ない。唯一、筆者の手元にあるのは、Greg (1939:3) に収録されている以下の記述である。

[c. September 1565]

**greffeth** Recevyd of Wylliam greffeth for his lycense for pryntinge of a Tragic [sic] of gorboduc where iij actes were wretten by Thomas norton and the laste by Thomas Sackvyle & C’  
iiij<sup>d</sup> [A 132<sup>b</sup>]

(9) St. Dunstan’s in the West という場所のトポスの歴史の変遷については、Wemreb and Hibbert (eds.), pp.725-26 を参照のこと。

(10) John Day が出版業界に入ったのは1546年のことであるが、その6年後の1552年には既に印刷業者兼出版業者として大成功を収めていた。また、1572年12月13日にカンタベリー大司教 Matthew Parker が Lord Burghley こと William Cecil に送った手紙には、Day が出版業仲間からかなりの妬みを受けていたことを示す記述がある。詳しくは、St. Paul’s Cathedral の場所のトポスについて優れた論考を展開している Blayney (2000), pp.322-43 を参照のこと。

(11) Rasmussen (1986).

(12) Heywood, trans., (1982).

(13) Berlin (1974).

(14) OED の “**Line**, *v.*<sup>1</sup>, 5. In certain technical senses (chiefly *to line up*). **a. Bookbinding.** To glue on the back of (a book) a paper covering continuous with the lining of the back of the cover.” という意味を採用して、“line with white” を「裏地が白の」と訳した。だが、このカテゴリーでの初出は1880年となっており、かつ、当該箇所は一つの表現に二つの意味をかけ合わせたとも考えられるので、シェイクスピアの『ヘンリー五世』（1599年）の第二幕第四番七行を初出例として挙げている “†2. To strengthen by placing something along the side of; to reinforce, fortify. Also *fig. Obs.*” の定義も捨て難い。この解釈に立った場合、白と黒の二項対立モデルは、「補完」、「強化」、「改良」の意味の中で、より際立つことになる。この読みは、「刊行者緒言」の中で、白を善なるもの、美しいものとして比喩的に表象する戦略が採られていることを指示する証拠となる。

(15) 「デイ版」の装丁については未見。

(16) Small (1931).

(17) Tydeman, ed. (1992), p.288, n.1389-96 を参照のこと。

(18) 時事的な背景に理由を求めるとすれば、1569年に頻発した諸伯の叛乱はその政治的性質から、ここで問題にしている8行の欠落理由になり得る。更に視<sup>パースペクティヴ</sup>野を広げ、1588年のスペイン無敵艦隊の撃退という記念すべき年を経て、エリザベスが為政者としての権力基盤をほぼ確立した1590年に出された版で欠落8行が復活することになったという仮説を立てることも出来る。これはひとまず、説得力を持つ説明になるだろう。

(19) 1590年版では “Printed by *Edward Allde* for *John I Perrin*” とある。これについては Greg (1939:116) を参照されたい。

(20) 1569年から1570年にかけて、デイはノートンがらみの刊本を次々に印刷している。このいわば「ノートン全集」とも言うべき書籍群の刊行を含む一連の商業活動において、取り分け1570年から数年間で、どれほどの冊数が売りさばかれたのかは定かでない。だが、1572年12月13日に Matthew Parker が記した手紙を信頼し得る史的資料と見做すことが出来れば、書籍業者としてのデイは、その時点で、2, 3千ポンド相当額の書籍を抱えていたらしい。詳しくは, Brooks (2000), pp.23-42 を参照されたい。

## Primary Sources

Cauthen, Irby B. Jr., ed. *Gorboduc; or, Ferrex and Porrex* <Regents Renaissance Drama Series>. Lincoln, NE: University of Nebraska Press, 1970.

Cunliffe, John W., ed. *Early English Classical Tragedies*. Oxford: Clarendon Press, 1912.

Norton, Thomas and Thomas Sackville. *The Tragedy of Gorboduc [1565]*. (STC 18684)

Sackville, Thomas and Thomas Norton. *Gorboduc [1570]: The Tragedy of Ferrex and Porrex* <A Scholar Press Facsimile>. Menston: The Scholar Press Ltd., 1968.

Tydeman, William, ed. *Two Tudor Tragedies* <Penguin Classics>. Harmondsworth: Penguin,



1992.

## Secondary Sources

- Axton, Marie. *The Queen's Two Bodies: Drama and the Elizabethan Succession*. London: Royal Historical Society, 1977.
- Baker, Howard. *Induction to Tragedy: A Study in a Development of Form in "Gorboduc," "The Spanish Tragedy," and "Titus Andronicus."* New York: Russell and Russell, 1939.
- Berg, Emmanuel. "Gorboduc as a Tragic Discovery of 'Feudalism'" in *SEL* 40:2 (2000 Spring), pp.199-226.
- Berlin, Norman. *Thomas Sackville* <Twayne's English Authors Series, 165>. New York: Twayne Publishers, Inc., 1974.
- Bevington, David M. *Tudor Drama and Politics: A Critical Approach to Topical Meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1968.
- Blayney, Peter W. M. "John Day and the Bookshop That Never Was" in *Material London, ca.1600*, ed. Lena Cowen Orlin. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2000, pp.323-43.
- Breitenberg, Mark. "Reading Elizabethan Iconicity: *Gorboduc* and the Semiotics of Reform" in *ELR* 18:2 (1988 Spring), pp.194-217.
- Brooks, Douglas A. *From Playhouse to Printing House: Drama and Authorship in Early Modern England* <Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture, 36>. Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Cauthen, I. B. Jr. "Gorboduc, Ferrex and Porrex: The First Two Quartos" in *Studies in Bibliography: Papers of the Bibliographical Society of the University of Virginia* 15 (1962), pp.231-33.
- Coch, Christine. "'Mother of my Countrye': Elizabeth I and Tudor Constructions of Motherhood" in *ELR* 26:3 (Autumn 1996), pp.423-50.
- Courtney, Leonard H. "The Tragedy of *Ferrex and Porrex*" in *Notes and Queries*, Series II, X (1860), pp.261-63.
- Craik, T. W. *The Tudor Interlude: Stage, Costume, and Acting*. London: Leicester University Press, 1958.
- DNB=*The Dictionary of National Biography*, 14. Ed. Leslie Stephen and Sidney Lee. London: Oxford University Press, rpt.1993, pp.666-70.
- Dust, Phillip. "The Theme of 'Kinde' in *Gorboduc*" in *Salzburg Studies in English Literature: Elizabethan Studies* 12 (1973), pp.43-81.
- Dust, Philip and William D.Wolf. "Recent Studies in Early Tudor Drama: *Gorboduc*, *Ralph Roister Doister*, *Grammer Gurton's Needle*, and *Cambises*" in *ELR* 8:1 (Winter 1978), pp.107-

19.

- Feuikkerat, Albert, ed. *The Prose Works of Sir Philip Sidney*, Vol.3. Cambridge: Cambridge University Press, 1968.
- Greg, W.W. *A Bibliography of the English Printed Drama to the Restoration*, Vol.1. London: The Bibliographical Society at the University of Oxford, 1939.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*, 2nd edition, revised by S. Schoenbaum. London: Methuen, 1964.
- Hartley, T. E. *Proceedings in the Parliaments of Elizabeth I: 1558-1581*. London: Leicester University Press, 1981.
- Hergerson, Richard. *Forms of Nationhood: The Elizabethan Writing of England*. Chicago: The University of Chicago Press, 1992.
- Heywood, Jasper, trans. *Thuestes*, by Seneca, ed. Joost Daalder <New Marmails>. London: Earnest Benn, 1982.
- James, Heather. *Shakespeare's Troy: Drama, Politics, and the Translation of Empire* <Cambridge Studies in Renaissance Literature and Culture, 22>. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- James, Henry and Greg Walker. "The Politics of *Gorboduc*" in *English Historical Review* 110:435 (February 1995), pp.109-21.
- Jones, Norman and Paul Whitfield White. "*Gorboduc* and Royal Marriage Politics: An Elizabethan Playgoer's Report of the Premiere Performance" in *ELR* 26:1 (Winter 1996), pp.3-16.
- King, John. "Queen Elizabeth I: Representations of the Virgin Queen" in *Renaissance Quarterly* 43:1 (Spring 1990), pp.30-74.
- Levin, Carole. *The Heart and Stomach of a King: Elizabeth I and the Politics of Sex and Power*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1994.
- Moretti, Franco. "A Huge Eclipse": Tragic Form and the Deconsecration of Sovereignty" in *Genre* 15:1-2 (Spring-Summer 1982), pp.7-40.
- Neale, J.E. *Elizabeth I and Her Parliaments: 1559-1581*. New York: Jonathan Cape, 1958.
- OED = *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Rasmussen, Eric. "The Implications of Past Tense Verbs in Early Elizabethan Dumb Shows" in *English Studies: A Journal of English Language and Literature* 67:5 (1986), pp.417-19.
- Ribner, Irving, *The English History Play in the Age of Shakespeare*. Princeton: Princeton University Press, 1957.
- Small, S.A. "The Political Import of the Norton Half of *Gorboduc*" in *PMLA* 46 (1931), pp.641-46.
- Swart, Jacobus. *Thomas Sackville: A Study in Sixteenth-Century Poetry*. Groningen, 1949.
- Talbert, Ernest W. "The Political Import of the First Two Audiences of *Gorboduc*" in *Studies in Honor of DeWitt T. Starnes*. Austin, 1967, pp.87-115.

- Vanhoutte, Jacqueline. "Engendering England: The Restructuring of Allegiance in the Writings of Richard Morison and John Bale" in *Renaissance and Restoration* 20:1 (Winter 1996), pp.49-77.
- . "Community, Authority, and the Motherland in Sackville and Norton's *Gorboduc*" in *SEL* 40:2 (2000 Spring), pp.227-39.
- Weinreb, Ben and Christopher Hibbert (eds.). *The London Encyclopaedia*. London: Papermac, 1993.
- 小林潤司・丹羽佐紀・山下孝子・大和高行 (共訳) 「ゴードラック—翻訳と注解—第1回」『鹿児島国際大学 国際文化学部論集』2:1 (2001), pp.73-103.
- 小林潤司・丹羽佐紀・山下孝子・大和高行 (共訳) 「ゴードラック—翻訳と注解—第2回」『鹿児島国際大学 国際文化学部論集』2:2 (2001), pp.79-96.
- 斎藤國治・村上文昭 (訳) 『エリザ朝初期悲劇喜劇集』東京：中央書院, 1981年。
- 高森暁子 「*Cymbeline* : ブリテンの政体編成とローマ」『九州英文学研究』(日本英文学会九州支部) 17 (2000), pp.25-38.
- 真部多真記 「『シンベリン』におけるローマをめぐる」『筑波イギリス文学』5 (1999), pp.51-70.
- 吉原ゆかり 「増殖するスペクタキュラー・ボディーズ—ルクレティア王政転覆伝説の誘惑」末廣 幹 (責任編集) 『国家身体はアンドロイドの夢を見るか—初期近代イギリス表象文化アーカイヴ, 1—』東京：ありな書房, 2001年, 第1章, pp.13-54.

**THE**  
**TRAGEDIE OF GORBODVC;**  
 whereof thzee Actes were wytten by  
*Thomas Norton,* and the two laske by  
*Thomas Sackvyle.*  
 Sett forth as the same was shewed befoze the  
 Q<sup>U</sup>EENES most excellent Maieste, in her highnes  
 Court of Whitehall, the xvij. day of January,  
 Anno Domini, 1561. By the Gentlemen  
 of Chynner Temple in London.



IMPRINTED AT LONDON  
 in Fleetstreet, at the Signe of the  
 Faucon by *William Griffith:* And are  
 to be sold at his Shop in Saincte  
 Dunstons Churchyarde in  
 the West of London.

Anno, 1565. Septemb. 22. 25

¶ The Tragidie of Ferrex  
and Porrex,  
set forth without addition or alte-  
ration but altogether as the same was shewed  
on stage before the Queenes Maiestic,  
about nine yeares past, *vz.* the  
xviij. day of Ianuarie. 1561.  
by the gentlemen of the  
Inner Temple.

Seen and allowed, &c.



Imprinted at London by  
John Daye, dwelling ouer  
Aldersgate.

*See above  
the Bodleian 257\**

デイ版 (1570) のタイトルページ (Scolar Press のファクシミリより転載。原  
本は *the Bodleian Library, Oxford (Malone. 257\*)*)